

Title	見ることと見られること：『夢想』における孤独と著名性
Sub Title	Voir et être vu : la solitude et la célébrité dans Les rêveries
Author	井上, 櫻子(Inoue, Sakurako)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2020
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.119, No.2 (2020. 12) ,p.159 (22)- 167 (14)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	小倉孝誠教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01190002-0159

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

見ることと見られること

——『夢想』における孤独と著名性——

井上 櫻子

18世紀を代表する思想家ジャン＝ジャック・ルソーについては、2012年が生誕300年のメモリアルイヤーであったこともあり、2010年代前半に多くの研究書が刊行された。こうした流れの中で歴史学者アントワヌ・リルティが2014年に発表した『セレブの誕生 「著名人」の出現と近代社会』¹は、著名性という主題に着目することで、ルソーの著作の中でもとりわけ難解とされる自伝的著作『ルソー、ジャン＝ジャックを裁く 対話』を新たな視点からとらえなおしたきわめて野心的な著作である。『セレブの誕生』においてリルティが特に明らかにしようとしたのが、ルソーにおける著名性と孤独との微妙な関係である。

ところで、孤独という主題は、ルソーの自伝の中でも特に、『孤独な散歩者の夢想』において重要な位置を占めるとみなされてきた。そこで本論考では、著名性という問題との関連から、このルソー最後の著作を再読してみたい。

I.『孤独な散歩者の夢想』における著名性の問題

「こうして私はたった一人になってしまった」²という一文から始まる『孤独な散歩者の夢想』はルソーが完全に公衆と社会から背を向け、全き孤独の中で自己を探究した書であると考えられてきた。『夢想』の中でも叙情性にあふれ、ロマン主義時代の到来を予示するテキストとして繰り返し引き合いに出される「第5の散歩」は、亡命中に立ち寄ったサン＝ピエール島でルソーが一人孤独に享受する幸福を語ったものであり³、この作家の孤独への好みを印象付ける大きな要因となっていると言える。

しかしながら、『夢想』のさまざまなエピソードを注意深く読んでみると、ルソーはこの作品をもっぱら自分のためだけに書いたわけではなく、むしろ公衆がルソーに向けるまなざし——人々のうわさや自分についてのニュース——に強い関心を持ち、きわめて敏感に反応している様子が見て取れる。メニルモンタンでデンマーク犬と衝突して大怪我をしたルソーが、後日この事故がもとで死んだという誤報が『アヴィニョン通信』に掲載されているのを目にして衝撃を受けたというエピソード⁴などはその好例であろう。

『セレブの誕生』第5章で、リルティは『夢想』に注目しながら、晩年のルソーが社会および公衆に対して両義的な態度を示していると指摘している。

「もし、私の顔かたちや外見的な性格が、私の性格や内面的な性格と同じくらい全く人々に知られていなかったら、私は今でも彼らに囲まれて生きていただろうに」。著名性がルソーを孤独へと追いやる。著名性のせいで、彼はいかなる形でも真の人間関係を望むことができないのだ⁵。

つまり、ルソーが孤独を選ぶのは、逆説的にも彼が著名人であるということと密接な関係を持つというのである。『セレブの誕生』においては『ルソー、ジャン＝ジャックを裁く』の分析が中心的位置を占め、『夢想』については付随的に触れられるにとどまっている。そこでここでは、リルティの指摘をもとに、『夢想』のなかでも「第6の散歩」と「第9の散歩」を読み直すことを試みたい。

「第6の散歩」では、散歩の途中、ダンフェールの市門（現在のパリ南部ダンフェール＝ロシュロー近辺）でルソーが出会った足の不自由な物乞いの少年に関するエピソードから考察が始まる。ルソーはパリ南部のジャンティイーに植物採集に出かけることを好んでおり、ここに到達するにはダンフェールの市門を通るのが最も近道であった。にもかかわらず、ルソーは次第にこの近道を避け、遠回りをするようになる。その理由を語った一節には、自らの道徳性と「著名性」という問題に対するルソーの興味深い証言が認められる。

次第に習慣となってしまったこの楽しみは、どうしてだかわからないが一種の義務となり、ほどなくしてそれが苦痛に思われるようになった。それは特に前置きとなる長談義を聞かなくてはならなかったためだった。その中で子供

は必ずしきりとルソーさんと呼び、私のことをよく知っているとしそうとするのだが、そこから反対に彼にそう教えた人々と同様、私のことなど知らないことがよく分かった⁶。

物乞いの少年との出会いは、ルソーにとって自分が著名人であるにもかかわらず、実際には人々に「よく知られて」はいないと気づくきっかけとなっている。そして、まさしくこの矛盾した状況から、ルソーは社会の中での自分の立場について再考すると同時に、自分が道徳的感情を備えていると主張して、自己弁護することになる。というのも、彼は哀れな少年と出会うことを避けるためにダンフェールの市門を迂回するのが冷淡な行為であることをよく分かっているからである。そして、ルソーは自分を正当化するために「義務」と「善行」についての考察を展開する。ルソーによれば、「義務」は「予想していなかったような契約の連鎖」⁷、つまり社会によっていわば強制された道徳規則であるのに対し、「善行」は「真情の吐露」⁸をもってなされるものとされる。したがって、義務を果たすことはルソーにとっては一種の「隷属」であり、苦痛であるのに対し、善行をなすことは甘美な喜びを与えてくれるものだというのである。かくしてルソーは自分が心の中で守ろうとする道徳原理が、同時代人によって共有され、社会で受け入れられている道徳規則の優位に立つことを強調する。そして、自分が社会生活において積極的に「善いこと」をなすのを控えるのは、自分の意図がたとえ善意によるものであったとしても、人々から誤解されることを恐れているからだ、と述べるのである。

社会の中で善行をなすことができないと感じるルソーは、善意に基づいて自由に行動できる条件について思いをめぐらせる。

もし私が自由で、世に知られておらず、そうあるようできているように孤独であり続けたとしたら、私は善いことしかしなかっただろう。なぜなら心の中にいかなる悪しき情念も持ち合わせていないからだ。もし私が神のように目に見えず、全能であったとしたら、神と同じように慈悲深く、善良であったことだろう⁹。

「もし私が自由で、世に知られておらず、そうあるようできているように孤独で

あり続けたとしたら」という一節からは、ルソーが「孤独な状態」そのものを愛しているというよりも、むしろ他人の好奇のまなざしから逃れ、自分の意志に基づいて行動できる環境を望んでいるさまが垣間見られる。

ジュネーヴ学派の批評家マルセル・レーモン¹⁰以来、『孤独な散歩者の夢想』はルソーが孤独の中で推し進めた自己探求の軌跡を記した書とみなされる傾向が強かった。しかし、この作品においてルソーが展開する自らの道徳性についての思索からは、彼が常に他人のまなざしを意識していることが確認される。「人からどのように見られているか」という問題は、『夢想』執筆時のルソーに常につきまとうものであった。実際、論の完結性という観点からすれば、『夢想』の最後の章とも言える「第9の散歩」には、他者のまなざしに対する興味深い言及が認められるのである。

II「第9の散歩」におけるまなざしの問題

義務と善行についての考察が展開される「第6の散歩」結論部において、ルソーはもしギュゲスの指輪を持っており、指輪の力で自分の姿を見えなくすることができたとしたらどのようなことがしたいか、考えを述べている。

「私が望んだであろうことは」たった一つである。それはすべての人の心が満足しているのを見ることだっただろう。公衆の幸福な様子だけが永続的な感情で私の心を打ち、それに協力したいという強い欲求が私の最も永続的な情念となっただろう¹¹。

そして「第9の散歩」からはルソーが「第6の散歩」で示していたような道徳律を実践に移している様子が見て取れるのである。「第9の散歩」は、幸福と人間の条件についての考察から始まる。

幸福は永続的な状態であって、この世では人間のためのものとは思われない。[…] 私は幸福な心の持ち主をほとんど見たことがない。おそらく全くないだろう。しかし、心が満たされた人はしばしば見かけたことがある。そして、私の心を打ったあらゆるものの中で、最も私を満足させたもののなの

だ。それは物理的感覚の内的感情に対する影響力の自然な結果だと思っている。[…] 満足していることは、まなざし、物腰、口調、態度に表れ、それを見る人にも伝わるように思われる。人々皆が祭りの日に喜びに身を委ね、人生の雲間を通して、急速に、しかし鮮明に降り注ぐ広がりゆく至上の喜びの光にすべての人が晴れやかになるのを見ることほど甘美な快樂はあるだろうか¹²。

人間は存在論的レベルでは弱く、不完全であり、自己充足しているのは神だけである。ルソーは人間が絶対的幸福を享受できないことを認めている。しかしまた同時に、人間の条件に見合った幸福が存在すると確信している。それは他者と満足感、あるいは喜びを共有することで享受される精神的な快樂である。公衆の幸福を希求していると強調することで、ルソーは自己の道徳性と無実を弁護しようとしているのである。

実際、「第9の散歩」に織り込まれたさまざまなエピソードとそれを語るときの表現から、ルソーがこの章において自分の道徳論を実践に移しながら健全な人間関係を取り戻したいと願っていることを意識的に示そうとしているさまが確認される。たとえば、パリの北部のクリニャンクール村で幼い男の子に不意に膝を抱きしめられた時には、ルソーは「誰かのまなざしに私 [=ルソー] と共にいることの喜びと満足感を見」¹³ たいという願いがかなったと感じたとされるが、それは男の子が「深い親しみの念と優しさのこもった様子で[ルソーを]眺めていた」¹⁴ からに他ならない。このエピソードはルソーが自分の子供を孤児院へ送ったことへの非難¹⁵ に対する回答の延長線上に置かれたものであり、作家が世間の噂に敏感に反応していることを示すものと考えられる。またパリの西に位置するラ・ミュエット境界で散歩中の少女たちに施しをするエピソード¹⁶——少女たちとその引率係の修道女が全員ゲームをしてウーブリというお菓子を手に入れられるように、ウーブリ売りと交渉し、必要な金を払うというエピソード——においては、彼女たちとの出会いが忘れがたいものとなったのは、そこに居合わせた皆が「互いに満足する」¹⁷ ことができたからにはほかならない。皆が平等に喜びを享受したこの出来事を、ルソーは「祝祭」¹⁸ という語をもって形容しているが、実際、この場面は『新エロイズ』や『ダランベールへの手紙』に展開される祝祭のイメージ——ルソーが演劇の代わりに平等な社会に必要なとするスペクタクル——と

きわめて似通っている。

このように人々の満足した表情を見るのがルソーにとって大きな喜びであるのとは対照的に、彼を著名人として差別化する他者の好奇のまなざしは苦痛の原因となる。

時折私は立ち止まり、ふと気づくところとした善良な人々のつましい生活風景を眺めているということがあった。するとどうしてだかわからないがため息がもれるのだった。こうした些細な喜びに私が感動している様子を人々が見たのか、さらにこうした喜びを私から奪おうとしたのかかわからない。しかし、私が通り過ぎる時に人々の表情の変化、私がじろじろ眺められるその様子から、私がこうして正体を隠していられないようにしたということを理解せざるをえなくなった¹⁹。

この「第9の散歩」には、いわば「不幸の著名性」²⁰とも呼ぶべき現象が認められる。著名であることは、ルソーにとって重荷であり、呪いのようなものである。彼はまさしくその著名性ゆえに自由に行動することを阻まれる。それはまさしく、陸軍士官学校周辺を散歩する中でルソーが体験したことでもある。当初ルソーは退役軍人に挨拶をしたり、彼らと話をするを楽しんでいたのであるが、その友好関係はルソーの「身元」が知れることによって、突然終わってしまう。

しばらくすると、私は彼らにとって身元のわからない人«*inconnu*»ではなくなった。あるいは公衆と同じような目で見られるようになった以上、私は彼らにとって以前より馴染みのない、正体不明の人«*inconnu*»になった。丁寧扱われることも、挨拶されることもなくなった²¹。

このように「第9の散歩」には、皆が平等に満足感を共有するのを見る楽しみと、他者から「著名人」として好奇の目で見られることの苦痛が並置して語られ、ルソーがその両方の極の間で揺れ動いているさまが確認される。こうした不安のなかでルソーが心の支えとして頼ろうとするのが、かつて自ら理論的著作で展開した人間論なのである。

III. ルソーにおける自己イメージと人間論

ここで「第6の散歩」、「第9の散歩」においてルソーが公衆の幸福を望んでいることを主張したくだりを読み返してみると、彼が他者との共生を通して精神的な充足感を求めていることがわかる。こうした記述は、ルソーの社交性についての考え方と結びつけられると言えよう。とりわけここで思い出されるのが、『エミール』第4巻「サヴォアの助任司祭の信仰告白」の有名な一節である。

我々にとって存在するとは、感じることだ。我々の感受性は明らかに知性よりも前に存在したのだ。そして観念よりも前に感情を持ったのだ。[...]こうした感情は、個人については自己愛、苦痛への恐れ、死の恐怖、幸福への欲望である。しかし、疑うことができないように、人間はその本性から社交的である、あるいは少なくともそうなるようにできているとするなら、その種に関わる他の生得的感情によってしか社交的にはなりえない。というのも、物理的感覚しか考慮に入れないなら、人々を集める代わりにばらばらにしてしまうに違いないからだ。ところで、この自分と同胞との二重の関係から形成される道徳的体系から良心の衝動が生まれるのだ²²。

ここでルソーが人間の社交性は物理的欲求ではなく精神的欲求に基づくものであると主張しているのは、唯物論的な発想に基づいたディドロの社交性に対する考えに対する反論を展開しようとしてのことである。

ルソーが理論的著作と自伝的著作との連続性を意識していることは、「第3の散歩」において、ルソーは「サヴォアの助任司祭の信仰告白」で展開した道徳論を擁護しようと試みていることから確認される。ルソーによれば、この作品は「現代の人々の間では不当に名誉を汚され、冒瀆されたが、いつの日か良識と善意が再生すれば人々の間に変革を起こしうる」²³とされる。そのような確信のもと、彼は自ら構築した道徳体系に忠実に生きる決意をしたと主張する。それはこの道徳体系が自分を幸福にしてくれるものだからだというのである。

いや、虚しい議論では、私の不滅の本性と、この世界の構成と、そこに支配

する物理的秩序の一致を突き崩すことはできない。それに対応する道徳的秩序——その体系は私の探求の結果である——に、私の人生の不幸に耐えるのに必要な支えを見出すのだ。他のいかなる体系においても、生きる上での頼りになるものはなく、絶望して死んでしまうだろう。私は生きとし生けるものの中で最も不幸な者となるだろう。運命と人々に抗い、それだけで私を幸福にしてくれるのに十分な体系をしっかりと守っていこう²⁴。

『孤独な散歩者の夢想』において、ルソーは散歩の折の思索を思いつくままに書き綴っているわけではなく、自己イメージをかつて理論的著作で展開した道徳性と社交性に関する議論に合致する形で示そうとしているのである。かくして彼は社会から不当に断罪された著作と自己の道徳性を弁護しようとするのである。

『孤独な散歩者の夢想』は、ルソーが心の平静を保つために完全な孤独の中で綴ったものととらえられる傾向にあった。おそらく孤独なルソーというイメージを定着させるきっかけとなったこの作品のタイトルは、作者自身がつけたものではなく、その庇護者ジラルダン侯爵によるものであることを忘れてはならないだろう。著名であるがゆえに公衆の注目を浴びるルソーは、その視線を意識しつつ、自分を他者に「見せたい」姿に演出する。孤独と著名性という問題に注目するとき、すでに多くの研究が重ねられてきた『夢想』についても公衆の好奇心と作家の自己演出という新たな問題系のもとに読み直すことが可能になるになるかもしれない。

(付記) 本論考は、『セレブの誕生 「著名人」の出現と近代社会』の著者アントワヌ・リルティ氏を招聘し、2019年10月20日、東京・恵比寿の日仏会館ホールにて開催したシンポジウム「『著名性』の誕生——18世紀、19世紀における文学と著名性——」にて行った報告(仏語)をもとに、多少の加筆をほどこしたものである。なお、本シンポジウムは、2019年度日仏会館「日仏学者交換プログラム」、文部科学省科学研究費補助金・基盤研究(C)「18世紀フランスの描写詩にみる感性論、自然描写、道徳論についての総合的研究」(課題番号17K02601代表 井上櫻子)の助成を受けたものである。

- 1 Antoine Lilti, *Figures publiques. L'invention de la célébrité (1750-1850)*, Seuil, 2014. (邦訳) アントワース・リルティ『セレブの誕生 「著名人」の出現と近代社会』、松村博史、井上櫻子、齋藤山人訳、名古屋大学出版会、2019年。
- 2 Rousseau, *Les Rêveries du promeneur solitaire*, dans *Œuvres complètes*, édition publiée sous la direction de Marcel Raymond, Gallimard, la « Bibliothèque de la Pléiade », t. I, 1959, la « Première Promenade », p. 995.
- 3 *Ibid.*, la « Cinquième Promenade », pp. 1045-1047.
- 4 Rousseau, *Les Rêveries*, O. C. I, la « Deuxième Promenade », pp. 1008-1009.
- 5 アントワース・リルティ『セレブの誕生 「著名人」の出現と近代社会』、p. 211。
- 6 Rousseau, *Les Rêveries*, O. C. I, la « Sixième Promenade », pp. 1050-1051.
- 7 *Ibid.*, p. 1051.
- 8 *Ibid.*
- 9 *Ibid.*, pp. 1057-1058.
- 10 Marcel Raymond, *Jean-Jacques Rousseau : La quête de soi et la rêverie*, José Corti, 1962.
- 11 Rousseau, *Les Rêveries*, O. C. I, la « Sixième Promenade », p. 1058.
- 12 Rousseau, *Les Rêveries*, O. C. I, la « Neuvième Promenade », p. 1085.
- 13 *Ibid.*, p. 1089.
- 14 *Ibid.*
- 15 *Ibid.*, pp. 1086-1089.
- 16 *Ibid.*, pp. 1090-1092.
- 17 *Ibid.*, p. 1091.
- 18 *Ibid.*
- 19 *Ibid.*, p. 1095.
- 20 「不幸の著名性 « la célébrité des malheurs »」という表現はルソーの『告白』に見出されるものであるが、A. リルティは2019年10月16日、慶應義塾大学三田キャンパス北館ホールにて「ルソーと著名性 不幸の著名性：ルソーと公衆・読者 « Rousseau et la célébrité. La célébrité des malheurs : Rousseau et son public »」と題する講演会を行った。その内容については以下を参照のこと。アントワース・リルティ「(翻訳) ルソーと著名性 不幸の著名性：ルソーと公衆・読者」井上櫻子訳、『慶應義塾大学日吉紀要 フランス語フランス文学』第70号、2020年3月、pp. 72-94。
- 21 Rousseau, *Les Rêveries*, O. C. I, la « Neuvième Promenade », t. I, p. 1095.
- 22 Rousseau, *Émile ou de l'éducation*, O. C. IV, 1969, l. IV, p. 600.
- 23 Rousseau, *Les Rêveries*, O. C. I, la « Troisième Promenade », p. 1018.
- 24 *Ibid.*, pp. 1018-1019.